

まほー使い【徳川まつり】支援
小説

ももね@まゆすきp

目次

まほー使い【徳川まつり】支援小説

まほー使い【徳川まつり】支援小説

ばわほー！でわんだほー！なまつり姫のまほー使い、見たくありませんか???

「んん??朝からどうしたのです?」

妖精さんも魔法使いさんもたーくさんっているこの不思議な国には「まほー使い」と呼ばれているお姫様のような女の子がいるのです。

それが私、まつりなのです。

「うっかり人間の女の子を呼んじゃった!?!なのですか!?!」

うっかり妖精さんが、間違えて人間の女の子をこちらの国にご招待しちゃったよ
うです。

姫もさすがにこんな展開に驚きなのです。

「…うう、落ち着いてハーブティでも飲むのですよ。」

まほー使いといえはハーブティを飲むのが一番らしいかな？なんて思って飲み始めたハーブティ。

ちよつと渋い…。煮出しすぎたのです…。

うっかり妖精さんは机によじ登ってマシユマロを食べ始めました。

「こちらら、それは…姫のですけど特別に全部あげちゃうのです。」

マシユマロ、大好きなのですよ？…焼きマシユマロが。

別に皆さんから貰いすぎて困ってるわけではないのですよ？マシユマロ。

「妖精さんが呼んじやった女の子は…特別に姫のおうちでおもてなしするしかないのですよ。」

マシユマロを美味しそうに頬張る妖精さんを見て、ため息が溢れちゃいます。

「でも、この国のわんだほーでびゅりほーな世界観に女の子もうつとりするのです!!!」

ただ、一つだけ懸案事項があるので。

「がおがおーっ!!」

オオカミさんがこの辺を縄張りに活動を開始しちゃってるのですよね…。

「がおーっ、食べちゃうぞがおーっ!!!」

おかげさまで姫のおうちのおそばには妖精さんくらいしか寄り付かなくなってるのか内緒なのです。

ちよつとまって。頭を整理しよう。

ふわふわと妖精さんが飛び回ります。

「誰のせいで姫はこんなに悩んでるのだと思ってるのですかー?」

ぷにぷにとほっぺたをつついて抗議です。

妖精さんはごめんねえと言いながら女の子を迎えに飛び立っていき……え? まだどうするか言っていないのです!!

かむばーっくなのです!!!

まってなのです!!!!!!

ただし時すでに遅し。

妖精さん早すぎなのです…。すぴーでいーなものも困り者なのです…。

仕方ないから、冷めたハーブティを飲みながら姫は待つのです。

「甘すぎ、なのです…。」

妖精さんが食べ残したほんとは苦手なマシユマロを頼張りながら、女の子が来るのを楽しみにしながら、のんびりと待つのです。

「どんな女の子が来るのかな。」

ちよっと不器用でとても優しい子かな？

男の人が苦手でおどした子かな？

喋り方がのんびりしててほんわかした子かな？

とーっても元気いっぱいな子かな？

どんな子が来ても、楽しみなのです。

だから、プロデューサーさん

「もっと、姫にマシユマロくださいね？」

マシュマロ（投票）を是非姫にお願いします!!!

今までのシアターシリーズでは一回も役を貰ってないんです。

今回の不思議の国はまつり姫を絶対ランクインさせたいんです。

どうか、ご支援をよろしくお願いします。

まほ一使い【徳川まつり】支援小説

著者 ももね@まゆすきp

発行日 2019年10月14日

ハーメルン-SS・小説投稿サイト-
<https://syosetu.org/novel/177626/>

本書の内容を無許可で転載・複写・複製することは、禁じられております。
